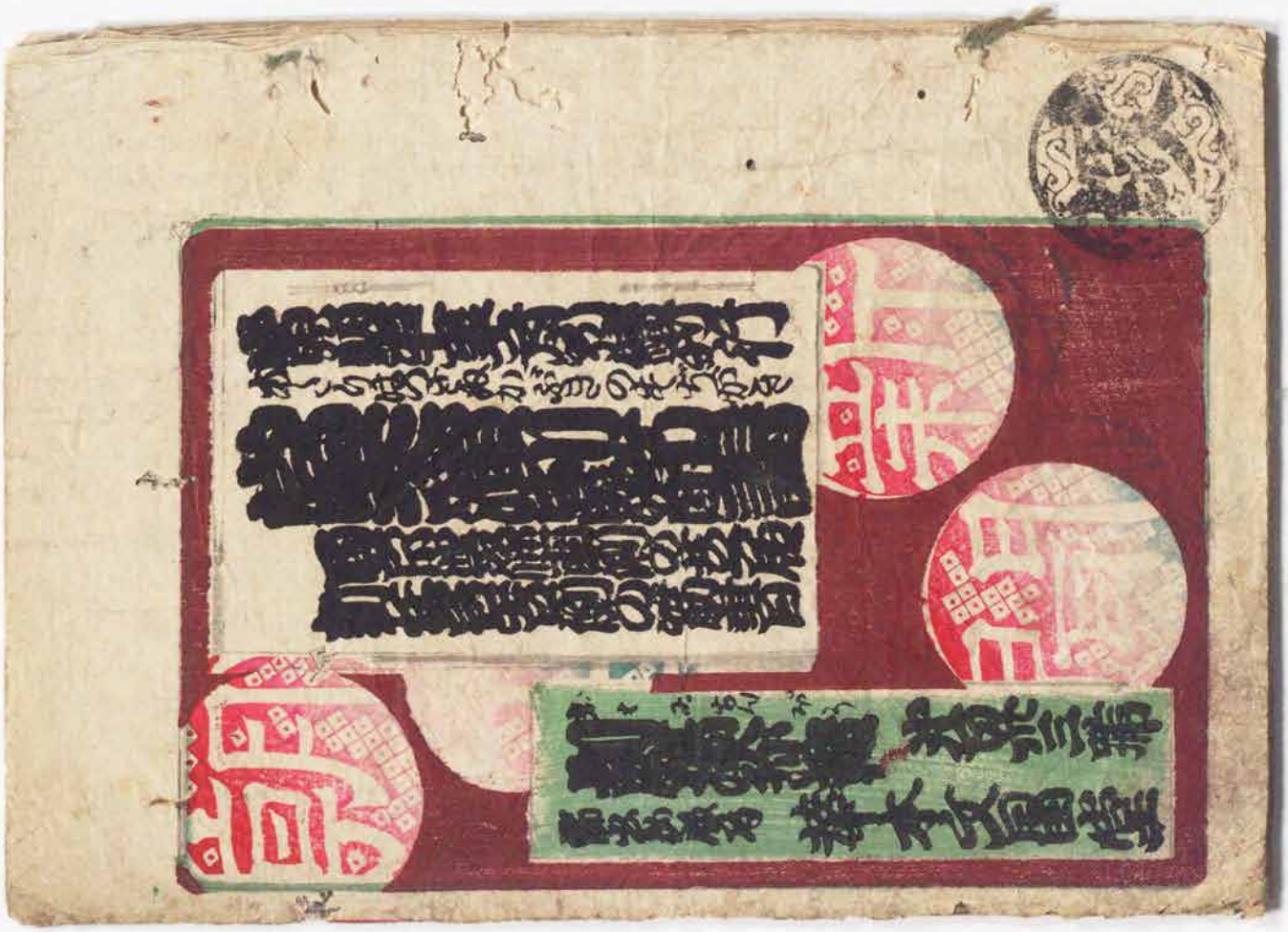
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



劇場珍報　第百三拾三號
京都四條南側の芝居新狂言筋書

短夜夢朝日手枕

編輯の草稿　拾壹冊

場割（大　序）京都室町御所の場○同室町家別館の場（二段目）北野天滿宮社内の場○寺の内よし久館の場○加茂堤の場（三段目）近江の國粟津廣瀬甚兵衛内の場○同奥の間玉里身賣の場（四幕目）伏見原田屋店先の場○京都。松原河原勝助殺しの場（五幕目）大阪龜井橋に忠僕松助身投の場○同冤無川網船の場（六幕目）大阪福島の裏長家。丑松卯の助隣住居の場（七幕目）大坂新町九軒夜櫻の場○同高島屋二階の場○同高島屋門口の場（八幕目）佐渡の國吉久配所の場（九幕目）大阪新町扇屋。玉菊部屋の場○同扇屋裏手の場○今宮村清三隱家乃場（十幕目）城川宇治の里庵室の場（大　詰）同扇の芝敵討の場

（大　序）京都室町御所の場。舞臺の造物ハ一面の筋塀此内に見越の松都て室町家築地外乃体。爰ヨ足輕四人六尺棒を携へ立掛り居る此見得時の鐘鶏笛ヨて幕明ト△何ト各位非常ぬ珍事でいムらぬか×されば御殿の内ならイザ知らず人も通いぬ御寶藏ゟの出火○夜巡りの者の見認てより早速消止ていムれど何かの紛失物があるとの事ヨて只今御詮義最中」ト大んゟ事を云て皆々上手へハ入る跡橋掛りゟ（仲間源八）黒裝束忍びの拵へヨて四方窺覗ひ乍ら出て來り呼子笛を吹是ヨて塀の内ゟ植木屋（繁藏）矢張黒裝束ヨて松そ樹ヨ取附半身出て下を覗ゟ（繁）源八か（源）繁藏か（繁）コ。チリヤ（源）然して首尾ハ（繁）氣遣ゟするな薫間と首尾能かの一品を」ヤ手を貸てくれ（源）合點だト是ヨて繁藏ハ寶物の箱を出して下す夫ゟ両人捨せりふ有て（繁）長治様ト打合し白銀の釜に黄金百両奪ヨ取たる此罪を吉久朝臣に負す狂言彼乃吉久さへ罪ヨ落せバ長治様の御無念も晴るといふもの僕も表向ハ植木屋だが内證ハ盗賊が商賣それも他人の依頼なら更ヨ受ねど當時山名の御家來をハ御威勢強い長治様。驕なれバとて貧乏公家ゟ恥をゥゝされ其儘に指を齧へても居られめへと僕が勸めた此仕事も平常出入乃且那なり御世話ヨ預る奉公と思ッて働たも植木屋だけ木へ登らしたら猿も同格そこで此松の木ゟら萬屋と首尾よく忍び込御寶藏の片隅を燒た紛れヨ釜をねヒ切盗出しゟ此釜を直に今ゟら吉久の邸の内へ忍入り庭の植込へ隱で偖が何れ道れぬ放火の盗賊是がスラリと行時ハ約束通り褒美の大金トいふ此時以前の足輕出て（足）怪しき曲者（両人）何を小癪なト双方へ投込すのが木頭ヨ道具者ト（室町家別館の体）爰ヨ（杉本長市）（宮山隼人）（上下黒白の諸士八人と俱に居ならび吉久朝臣の噂をする處へ（藤原の吉久）冠り束帯

○夜の部新狂言「新種園朝顔」（序幕）王子飛泉の場○海老屋坐敷の場○裝束櫓木蓙場の場（二幕目）新川や内の場○同放れ坐敷朝顔娘居間の場（二幕目）柳橋五調内の場（四幕目）新川や別荘の場（大詰）船橋驛宿やの場○役割は早川清三。忠僕松助。島人幸藏實と松助藝妓お梅の四役と（福助）松助女房お梅船大工卯の助。相模屋次郎三郎○都五調は（壽三郎）大坂屋伊兵衛。丑松の女房お夏のちに曳船宿り木新川屋音次郎と（珊瑚郎）玉里姫のちに契情玉菊。島人三吉。娘お志ゆんと（嚴笑）雇婆アお虎。料理人喜助。ゝし元お村と（芝の助）下僕勝助。若イ者七助。番頭慶六と（津多七）杉本長治ト按摩菊の市と（芝五郎）電の五郎兵衛ト新川屋徳右衛門は（玉猿）侍女おきさ後に尼智妙。妻お惠と（若菊）富山隼人。藝者の歌八（歌雀）奥方江川と（金作）新造玉琴箱廻し佐七と（八百三郎）其外岡助。猿升。珊の助。三吉。鶴助。門多。仲三郎。三ッ猿。市次郎。紅錦。壽の助。などの役もゆれど略す夫から坂上彦九郎。扇屋三郎兵衛。植木屋繁藏爲の者。實五郎の四役と（市十郎）松助の娘お松ト幇間高と（政次郎）吉久朝臣。船大工丑松。國司小六。相模屋太郎兵衛の四役は（雀右衛門）さて新狂言（園の朝顔）の筋書と第百三拾四號にて近日賣出し

の捧へにて笏を持出て來り形容の詞を濟して
（吉）出火の義ゑ付歴に詮義乃筋ありとい如何
成事にしぞや（隼人）イヤ其詳細御存知わらざれ
ば御不審も去事ながら昨夜の出火い怪火にて
御寶藏へ忍びし曲者め跡を眩ません其爲ゑ放火
なせ〻其雛び貴卿ゑ羅りし五炎難隼人近頃お
氣の毒みぞんず（吉）ヘ思ひ寄ぬ其仰せ曲者乙
び入しとなれば何ろ紛失の品にてそ（敵役）い
ろにゑ將軍家御祕藏の一品白銀の盆ならびに
黄金百両共紛失致してムる（吉）エヽ（敵役）夫
を貴卿へ疑ふい跡ゑ殘し是成る書狀此手跡覺
ぶムるか（吉）見ゑヨヤ是麼か手跡に寸分違は
ぬ大神樣（長）おとぼゑ敵成ゑ吉久殿貴卿が書
た手跡だ物（吉）ヨ能人かと思へば執權山名殿
の御家來長治殿是なる書狀を麼が認めし物な
りとい罪ゑ者に罪を負し給ふゑな（長）默り
召れ吉久卿大師流の書をなし者い公家武家の
其中にて貴卿ゑり外ないとの事すれば昨夜
の盗賊い貴卿の所爲に相違なき手跡ゑ證
據でござる（吉）然ば是成る一書い誰が手ゑ入
て吉久ゑ盗賊なゑと仰せ遊るゝぞ（敵役）それ
ぞ夜前類火の後御寶藏を改めし處それ成る杉
本長治殿が早くも見認て拾し書狀なんと覺が
ムらふがや（吉）イヤ吉久かつて存知ゑさぬ（皆
々）何といはるゝ（吉）總ドてかやぬな惡謀を
なす者い大事の浪んを厭ふがゆゑ證據と成べ
きかやふな書狀い燒棄るゞ當然いかに狼狽た
る曲者とて御寶藏へ忘るゝとい餘りの能忍察
する所吉久ゑ意恨を含ひ者あッて麼ゞ手跡の
偽筆を捧へ罪に取て落そん結構（長）ヤ（吉）ヘ
淺はかなゑ惡計ぢやなアト長治ゑ思入有て云
ト（隼）何樣拙者も左い存じたれゑ證據とある
に止を得ず一應お尋ねヤせしおれゑ○偽筆を
以て貴卿をば罪に落さん結構なるべしト立役
の諸士皆々吉久を厭ふ（敵役）ア否各位御來な
らぬ寶の盗賊偽筆ばかりゑ事い濟まい吟味の

上ゑ吟味させんと先刻吉久殿の館へ多人數
を調べに遣いしゑれやがて歸るでござろふ
哩（長）いかさま夫が論ゑり證據ト詞渡る此時
花道方（ヤ上升）ト盆の箱を持走り出「仰せに
隙び吉久卿出門の跡へ瓶入り諸所吟味致せし
處廣庭の樹木の陰ゑかやうな箱のあるべき筈
なく合點ゆかじと早速持歸り升てムり升るト
云吉久惱ヤ（吉）ヤ麼が館の庭中ゑそれゑる箱
がありしとか（隼）何ゑもせよ（皆々）是〻〻
（待士）はット件の箱を指上れば敵役の諸士直ゑ
箱の紐を解き蓋を明て態と驚愕（敵）臧ゑ是ぞ
疑ひもなき白銀の盆（吉）合點の行ぬ何して
それが。ヤヽヽヽ（長）なんと各位下拙が鑑定如
何でござる其品出し上からい最早ゑふわらが
ふとゑ言譯くらは昨夜の盗賊猶此上ゑ御詮義
あらば金子の白狀致すでござろう（敵役）いろ
に吉久卿御身が書流の偽筆ゑ以て意趣ある者
の惡巢とい何を證據ゑ仰せられいぞ。吾なら
盆い義臥公茶器第一の御祕藏物。是でも貴卿
の所爲でいムらぬか（吉）サア夫い（隼）申開き
の條も厶らぬゑがら我輩ゑ將軍家の御
前よしなに御執なしの仕つらん言開きの筋が
ござるか（吉）サア夫い（敵）言譯なくば放火の
盗賊貴卿の所爲ゑ相違あるまい（吉）サア夫い
〻〻（長）何と言譯の筋がムろう天罰のがれぬ
證據の密書拙者が見た目に相違ムるまいがト
屹度いふ吉久當惑の思入有てぢつひく是を隼
人が氣乃毒に思ひ（隼）指當ッたる吉久卿の御
難義此上い主人細川勝元へ申開へ得と吟味の
仕つきば吉久卿にい拙者が邸へ（長）アイヤ其
義い相成舛舞（隼）とい又なせに（長）然ばの事
サ中旬の十日い貴殿の御主人細川公の御係り
おれゑ月末の十日い拙者が主人山名宗全ゑ係
りにムれば事件落着致す迄拙者が主人へ吉久
殿を（隼）イ夫い相成ませぬ今日より山名殿の

御係にもせよ事あやしい昨夜の事然れば主人勝元と云ふ係や中也ゑ一應攝政家へ御屋ケ申せし上此方ゑ御引渡申すでムれば夫迄の御差配い御無用〳〵（長）ム、然らば拙者い館へ歸り一ト種々捨臺詞あッて敵役四人下手へはいる跡に隼人殘り思入有て吉久の傍へ行き懇切に氣を慰め人に意恨を受べき覺いムらぬゥト問ふ吉久其厚志を悦び「外に意恨を受べき義いムらねゃ彼の杉本長治。麿が娘玉里をば妻にくをよと強ての所望されども平常の品行よろしからざる者ゆゑに痛く恥ゥしめて歸返しゞ若やそれ等乃意恨にて（隼）ム、夫にて思ひ當る事あり云々ト不審の箇條を吉久に告げゥ此時以前の敵役二人出て來り「只今山名公より吉久朝臣をお引渡しあるべしとの仰せにムれば「イザ御立なされト無情いふ（隼）嗚呼寔に晴天白日も風雨の災ひありと思へバ（吉）人身の禍害いかで歎き申さんや（隼）夫もやがて曇の晴る

（吉）時節を相待申べ一（隼）左樣ムらゞ吉久卿（敵役）お立なされ（吉）ア淺猿しき身の成行ちやなァト是非なく山名の館へ拘引される此見得時の太鼓にて道具替るト以前の筋塀。爰に杉本長治。植木屋繁藏仲間源八立掛り居て繁（繁）且那昨夜の勸さいぞんな物でムり升（長）イ其方が勸めに依て身も其意に隨ひしが萬一事を仕損ゥなば一大事と思ひしに首尾よく仕ッて重疊〳〵（源）夫ゑ彼の玉里をゝ且那に指上なと斯いふ見ゥめも見まいもの大方吉久めを後悔致して居ませふよ（長）シテ奪ひし百両い（繁）懷中に此通りト出して見せるを手にとらず其儘兩人へ配與へ「拙者い是ゑ主人の許へ一部始終を申上げ細川の當番にゐらぬ先よし久兒が罪の落着を（繁）成程事件のバレぬ内片を附るが跡の用心（長）まだ其方にゥ談する義もあれば（繁）ハイ又金儲けの口あれば隨分片棒助ま拾う（源）夫ゐら且那首尾よく往た（兩人）

祝ひにちよッぴり（長）コレ」ト押へるのが木の頭（長）高うまをすゐ靜に致せト四方へ意氣注ぎ兩人い閉口の思入此樣にて柏子幕

（二一段目）京都北野天滿宮社内の場。

舞臺の道具い眞中に白木造の隨身門是に眞鍮の菱燈籠を掛ゞゥ上手に藤妓の染暖簾。紅塗の提灯の新製の白粉（君ゲ艶）の看版なゞを掛けたる茶店。下手い筋塀此前に奉納の石燈籠。空より紅葉の釣枝都て北野天滿宮隨身門の体幕明ト爰に參詣の仕出し大勢居て賑談笑云乍ら東西へ引込む跡唄に成り花道ゑ前幕の杉本（長治）仲間の（源八）宿屋の主個（大坂屋伊平）出になる扨其大坂屋伊平い長治の仲間源八に「ゐせ僕ゲ且那の足笑踏にぢッた其腹癒せに斯するのだト難題をいひかけられ迷惑の處へ敵役の（坂上彦九郎）が門の内ゑ出て來り（彦）イヤ源八まちやれ高の知れたる素町人へ無理咎めも大人氣なし（源）ヤさふ云貴君い（彦）坂上彦九郎手前でござるト深編笠をとる（長）オ、貴殿い坂上テモ思ひがけゐい（彦）拙者に逢てい貴殿の都合が惡うムるか（長）なんと（彦）拙者に賴んだ彼の一條貴殿忘れいやッしやるまい万一ゐ忘なら此町人の聞前で演立やふか。然らゞ邪摩なる此町人拙者が許す早く立去れト伊平を退け長治に向ひ（彦）罪なき者を罪に陷して貴殿の恨を晴させたい一体全体誰の光屁でムる皆此彦九郎の蔭でムるぞ。忘もせぬ此月中旬文言いかやう〳〵で大師樣の書狀をバ認めくれよと强ての依賴い戀の叶いぬ意恨晴しに吉久朝臣を人知れず罪に取て落さん謀企コレサ何も笑ふ顏を去かめて手を振にも及バぬ事僞筆に妙得し某もゑ大師やふの書狀をば書認めて渡せしに事成就ゥし上い褒美い望に任すとあるゆゑ其味ひ嘶を樂みに待に待ぞも沙汰となく彼の吉久い罪しながら拙者の謝禮を其儘に打捨て置るゝとい扨も〳〵」ト長治の非を

數へ褒美の金高の定めてあいのを幸ひにドロ金千両を貪り以後い猶更別懇にかだんを拵んと誓ひ立て三人連立門の内へは入る跡へ大坂屋伊兵衛が出て右三人の悪事を小陰で立聞をして居ぬ筋を述べ直に門へは入る跡明に成花道が吉久朝臣の娘（玉里姫）廣振袖お姫様の拵へにてかづきを冠り跡が侍女（おさささ）付添出に成「父上様の冤罪をば何卒救ひ給はるやふ日毎〳〵の歩詣でも云々ト憂き事繁き世をかこつ折柄爰へ以前の長治容子を親も出て來り（長）ィヤ其神よりい某が利益を與へヤでムろう（玉）ヤさいふあなたい日外館へお越なされし（長）山名の家來杉本長治よくも此お顔を忘れもせず覺てムるコレハ長治慰母しう思舛る哩（玉）ヤ又あなぬが利益を與へ給いんとい（長）されバ吉久朝臣にい放火盜賊の科に依り此程よりの御糺明其吟味を致す者い拙者が主人の山名宗全譬へ大罪を犯せゑとて底が主人と家臣の間此長治が腹一ッで親御の難義を御助ヤすい最易れ事。サ爰が其許への談合他人で有てい其義もなら泡と其許さへ娶りなバ拙者が爲にも勇の難義その縁を以て主人へ願ひ見事父御を救ふて見んが何と此長治と夫婦に成る氣いムちぬかコレ玉里殿ぞふでざる〳〵（玉里ムッと拵し思入有て氣を替（玉）不束な自らをばお厭もあふ其やふに仰せ下そり升る御深切お嬉しうい存升れどいかに父ち御難義がお救ひヤたけれ心とて自らが儘にゑならず此義斗い御免あそれて」ト取止のない返答をする處へ以前の（源八）出てお旦那其慈悲心いい止にして未だ白狀せぬ吉久の罪を玉里姫より詮義致さゑとヤ日頃のお望もトあごで知らせて玉里に繩を打かゝ役所へ引くト無理に拘引去かける處へ（艶立役の（早川清三）町人若旦那の拵へにて門の内より出て來り源八を突退け玉里をかばふ是にて長治い悔り（長）ヤ見れバ素

町人の分際にて武士ゐる者の家來ゆバ（源）なんで汝い投やァがッたト猪ゝを堪へ起上るト（清）何のおかた町人の私しがお武家様の御家來をば手ごめに致してとろしい者でムりませうか御仲間でも武士の御家來第一あなたの恥でいムりませぬかト例の穴に成（清）委細いあれにて聞て居升た此お女中を妻に迎へバ聟舅の縁に寄り吉久様とやらいふ此方の科を助けて遣ふとの事其お情い聞へまーたが其縁談が叶いぬとてお可愛さふに此お方に繩を打て引ふとい（ト私曲でいムりませぬか（長）ヤ（清町人ながら諸侯方へすゝしい出入も致す者お上向況の御詮義い捻ゞ拵した物でムり升るゝ一應其筋へ伺うて見たゝムり升をバ貴君のお住所御姓名をお聞せゐされて下さりませ（長）サァ夫い（清）お身を大事と思し召ゝ此儘お辭し下ゝるか（長）サァ夫い（清）お訴へ申ませうか（長）サァ夫い（両人）サァ〳〵（清）ゝ止申すい貴君のお爲餘もお叱りいムり升まいト敵役を言懲す是にて長治いへらず口をあきながら無念を堪へ源八を制して門の内へ引込む是と引違へて侍女おささ出て來り「是い〳〵いづきの方かい存ドませぬゝ姫君様の御難義をバよふお救ひ下さり升たト玉里も共に厚く禮をいふ夫ゝ清三い両人へやさーく挨拶して日暮前でいあり幸ひ私しも大宮通り迄歸る者にムり升れば苦しからずバお館迄側暴者の來ぬ内にお送りヤませうト此筋の臺詞渡り皆々花道へは入る跡へ以前の長治。彦九郎源八出に成「一ト筋繩でいゆかぬ玉里とこへ邪摩なゐ青二才め此上い彦九郎殿の策略の通り學習院よりの使者と僞り彼乃玉里めを引揚る「時刻も恰好宵闇の「曇りを幸ひ「是ゝ直に「用意を調へ「待合す其場所い「八里放れし加茂堤「成程さしづめ其時い齋世の宮い則ちお旦那「苅屋姫といあらねゞも女い同に公家ゝ姫君「身

ぞもが筆先一ツにて罪に落せし吉久い「取を直さず芝居あら菅相亟の役廻り「所も恰好北野なる天滿宮の社内にて「戀を執もつ拙者の思案い「櫻丸にい請取憎ひが牛い牛づれ下郎も一ト骨「然らば坂上「ぬからぬやうに(彦)「與力の手練いト腕を叩くのが道具替りの知らせ(彦)爰にあらわへ」ト此摸樣にて道具ぶん廻すト

(寺の内藤原の吉久朝臣館乃壕)道物三間の間玄關見附にさや形の襖上下邸塀松の釣枝都て吉久の館玄關先の体爰へ以前の玉里お花を清三に送られて花道ゑ歸ヤ(玉)今日の容子を乞一應母へヤ聞け何ゥの御禮をもヤあしせめてお茶などあうおささト憂を忘れて両人ゑ清三の深切を謝し「無理にお止も致ませねどお名前お所丈を呼しやヤ置て下さるませト問ぞも更に名をいはず(清)隨分共に親御樣乃寃罪の御難が晴升やふに天滿宮へ御信心を遊ばせませ云々ト挨拶そこ〳〵清三は元の花道へは入る跡見送りて(玉)町家ゑ育ちしい方にしていお手の内の見事といひ(ゑ)御器量あら物腰格好眞ゑあの御方に烏帽子裝束を着せ升たら業平さんも及び升まい(玉)お名も所も仰しやらねぞ必定筋目の賤からざる(ゑ)奥床しいお方でムヨ升るなァト爰へ吉久の(奥方江川)侍女ど共ゑ出て來り(江)かあしや我夫よし久殿ゑい終ゑ辨解述難く彌々賊の罪ゑ落。佐渡が島へ流罪乃宣告を受られしといあふ其知らせを松助に聞よヤ早ふ知らせたさにそあたの戻りを待兼て勝助を迎ひにやりしが途中で逢てせあんだか何の意恨で我夫を罪せし者かと知らねどそ唯跡々の身の用慎が肝要あればト夫ゑ侍女輩を遠遊け(玉)以前當家に勸めたる廣瀬甚兵衛ゑい今近江の國粟津の里に居るとやら道の程も遠ろらねば一ト先甚兵衛の方を便り又跡々いいかやふとも夫御得心なら松助に

も事の仔細を明せし上今宵の内に人知れず館をぬけて粟津の里へト母娘密に心を定め急て支度をする處へ下部の勝助はせ歸り(勝)ヤ姫君樣お歸りでムりましたろ何所で道ゑ逆ひ升たやらスヨ〳〵門前へ歸ッて見れば學習院からの御使者とて姫君樣を俄のお召あ〳〵それへ參り升たトいふ間程なく向ふより以前の坂上彦九郎足早に出て來り(彦)只今御家來を以て申入れしが吉久殿犯罪乃義に付娘玉里に俄に尋問ふべき仔細あれば即刻出頭致すべしとお掛ゑ乃過急のお召。早く同道致されよ(江)成程玉里い是に居升るゑの夜分俄のお召と何の仔細か合點の行ぬ(彦)イヤ夫い學習院へ參れば事理がわかるひぼ取ては役目の落度早くさッせへ(勝)アモシお使者樣御主人ゑい言譯立ぞ流罪と事が定まッたでいムませぬか(彦)ヤ(勝)サ日罪が疑としくば御吟味中に召れる筈元より覺のあい科にて流刑と罪の定まッたも皆惡人のさらした所爲それを思へば今頃にお呼出しといウサンな御使者」油斷とならぬト見張り居る玉里思案の思入有て(玉)母樣もお案事遊ばし升るゑ乘物にても苦しからずば不快をおして自ら出頭仕りませう併し暫時の猶豫をと使者へも挨拶そこ〳〵に奥の一ト間へ入にける僞迎ひい氣をいらち(彦)過急の御用に何坡ひまぞり早く用意を致さぬか(勝)何程早くとせき立ても館にあれば主人の骸そふせり〳〵と吐ばない(彦)こやつ又慮外を(勝)慮外とは何が慮外だト爭ふ折しも上手ゑ(六尺)姫君の御越にムり升る(彦)ゑ、それ待兼ゑ早くやれ(勝)イヤ下郎ゑ御供をそるのだ(彦)夫にゑ及ばぬ(江)デモ娘一人お預けヤと何とやら(彦)氣づかとしくば後刻迎ひに參るがよい哩ト言捨て乘物いそがせ彦九郎逸足早く立歸る跡に勝助思入有て(勝)學習院の使者とはいへど何ろそと〳〵致せし樣子だふも心に呑

明治十六年五月十二日出版御届　編輯兼出版人　大阪府平民　華本安次郎
東區北久寶寺町三丁目第三拾四番地
（代價參錢五厘）

込ませねば今の跡より見へ隠れに御供をして
と如何ト何ひ許を受て走るもそ江川も猶も打
案ト俄の召と何のお尋ね心悪りお事でもある
ト此時奥より（娘の玉里）風呂敷をさげ出來り
（玉）扨様お案じ遊ばし升るおいかに過急のお
尋問とて女子一人を夜中の召は必定忠人の謀
略ならんと推量せしゆゑ自らが躰にもてなし
乘物にて」ト鳥渡咄く（江）ム、夫ならアノ忠
義に厚き（玉）ア　モシ」ト押へ（玉）何事も油斷の
ならぬ時節ゆゑ此間に館を立退んと彼にも落
着く其先を申聞せてやり升たれば先大切な系
圖お位牌是をば卿の肌につけ暫時も早う栗津
迄ト玉里と江川の手を曳平舞臺へおゆる此時
花道ゟ大阪屋の手個伊兵衛足早に出に成（伊）
悪謀の跡を聽ふばつかゆ彼等の行衛を尋ねた
のでいろふ遲ふ成たれど北野で聞た彼の事を
ちッとも早う奥様へそふぢや〳〵ト舞臺へ來
る奥ゟ以前のおきさ書置を持こし元共に出て
來り（き）し、誰ゟと思へば三條の大坂屋どの何
の御用ゟ知らねども今此方と混雜最中。サア
どふ云譯か知らねども子細あッて姫君様にも
扨君諸共ゟ館を御立退遊ばそとて召仕の私し
らへ暇を取そと（ゟる此書置（伊）ヱ夫なら奥様
姫君にもエヽヤ折角北野で聞ゟ事をバおゟち
せ申しに來たものを。シテ何方へお立退なさ
れしか（侍女）夫がわかる程なれバ斯うろたへ
とせぬ哩なア（伊）ヱ殘念ゟト云此内柴垣のう
しろゟ玉里江川の手を取拔足をして花道へも
く是をおきさが透し見て（き）ヤ慥に奥様（侍
女）姫君様（伊）ナニ奥がガト提灯をさし出す
此模様よろ敷早めの合方にて道具替ると（加
茂堤の場）舞臺と高二重の草土手まん中に地
蔵堂所々に松の大木稲村松の釣枝向ふ一面野
面越しに加茂の神社の遠見。都て加茂堤の模
様時乃鐘にて道具納る」○扨豫て御高評を蒙り
升た（春會角力圖會）大本二冊は價五拾錢にて賣出し

劇場珍報　第百貳拾八號

中の芝居
新狂言筋書

短夜夢朝日手枕

別て御看客へ告奉つる　吉例の通り第百け
四ツ（二段目）の奥より大詰迄を掻摘ンで繰
た筋立ゟ只々當坐中而已の便用に當號へ
掲げ置ゟしゟが恰かも演劇を觀る格に臺詞
をも明細の筋書ゟ天張第百廿五號及び第百
廿六廿七の雨號へ掲げ置增て厶り升お望の
御觀客ゟ「二冊袋入の筋書」ト仰せ下され御
最寄にて御愛求の上猶「又當戯場の御高評」く
ださるべくいやう隅かゟ角迄ズラリット御
願ひ奉すト又も慾張る拙者ゟレ五存知の花
園一ッき更紗圓譜にてもお馴染のハンモト
（加茂堤の場）此場ゟ吉久の下僕松助が玉里姫
に化ケ升り態と玉里の駕に乘り主人を罪せし悪
人等を探ッて居るとゟ露知らぜ玉里姫ぢやト
一圖に得產九郎ト源八が耻辱を受る外そこ
へ大工の丑松同女房（お夏）奴の勝助杉本長治
などが出て闇闇に成ドタ勝助ゟ長治に縛られ
るのが幕●（三　幕　目）江州粟津廣瀬甚兵衛
の宅に玉里身賣の場。爰に忍ぶ玉里ゟ母の大
病を打案じ時金としてもあらざれば貧身の仆金
にて母ゟ藥禮又佐渡へ流刑になられし父の許
へ松助をば慰問にやる路用にやと終に母親乃
許を請け浪花新町の屋へ貳百両にて藝奉公
その内金の五拾両に書狀を添て佐渡へもく松
助に渡し殘ゟ金額百五拾両をば委曽母に渡す
夫ゟ母嬢別れの大愁嘆あッてドゟ玉里ゟ駕に
乘られ出てゆく跡凄ゟ合方に成雇婆アのお虎
が玉里ゟ母ゟ江川を縊殺して右乃百五十両を奪
ふ殘酷ゟ一譚を見せ其處へ植木屋繁藏が出て
お虎を威す詞よろ敷（繁）勝助と言合せ此宅へ
忍ンで動靜を聽ゟ玉里に返ッて我輩が謀られ
其埋草と思ッゟ儕の先を越し。せしめた財布
乃金額を爰で半額渡せバ承知否とぬかせば儕

も又料理い覺悟の人切庖丁ぞうだ〳〵ト詰寄て曲者同志が立廻りに成ド〻繁藏い お虎を斬殺して件の金を横奪の幕●（四　幕　目）伏見の舟宿原田屋店の場。扨も松助い佐渡へ趣く途中浪花に殘せし妻子にも永の別れに一ト目ありと逢て配所へ出立せんと伏見へ下り此舟宿へ風呂敷包を預け急用を達しに行く扨又松助の妻お梅い仔細あッて七年以來逢ぬ所夫の居處が幽かに知れたれど其安否を尋んと育目ながら娘のお松を杖にして京へ登る道すがら此舟宿にて支度の時我志らず自分乃包ト松助の包みを取違へ其中の書狀より松助は全く主人の介抱に佐渡へもくとの始末がわかり夫婦互ひに今日此舟宿の敷居を越て居ながら行違ひに成しかとお梅は歎く爰へ松助の朋友大坂屋伊兵衛が來て種々慰める詞よろ敷ド〻我宅へお梅お松を連歸る道具替るト京都松原川原勝助殺しの場。惡奴を殺して件乃百五拾両を奪ふたる繁藏い譫て曲者勝助との約束もあれど此大金い自分一人の德にせんと伏見の舟宿から程よく勝助を欺し終に此川原迄連出し斬殺して逃退く機會　早川清三）と云浪士に呼止られ片袖をばちぎられる本文乃筋爰へ（國司小六が出て早川と暗試合ひ幕切●（五　幕　目）い大坂淀川橋乃松助身投の場。忠義一圖ち松助い玉里姫が辛苦を忍ひて調へた路用乃金と書狀を入たる包をバ伏見に於て取違へし其不行屆を悔み種々樣々に思案をしても路金い出來ず詮方つきて龜井橋から身投の件此道具替るト尻無川網船の場。此場い一端身を投た松助が二段目のおささの舍弟卯の助ト女房お梅の實兄丑松の網船へ助け揚られ終に蘇生の幕●（六　幕　目）福島の事長家丑松卯の助隣住居の場丑松い松助を助けて我家へ連歸り書へ何物い失ふとも路銀さへあらば佐渡へ渡りて忠義を盡すに事は欠まじお氣遣ひさるなト男氣にいへど當なき金の才覺大きに困ッて居る是を察して女房（お夏）が態と丑松に愛想を盡し其身い二度の勤めに出て五十両を調へ丑松に渡す松助は其實意を悅び件の五十両を懷中して佐渡へ出立する扨隣家の卯の助い其松助の爲に姉のおささから頼れた事とい知らず五十両の金を現在今丑松が持て居たもの忍人なれど彼を殺し五十両を奪取て姉に渡さを傍輩の命を助ける功德のみか主人の爲にもかるとも心得終に丑松を殺せど金を持てゐず短筒の中かと探して居る所へ京からお梅お松が松助の荷物を携へ歸ッて來て兄の横死を歎く卯の助後悔の段にて幕●（七　幕　目）新町九軒夜櫻の場同高嶋屋二階乃場。て三幕目の玉里は身を若界の廓に沈め名を玉菊と改め世をあトきなふ送る內圖らず二段目の早川清三に巡り逢ふト「去年京都の松原川原より人を殺せし賊の司に吉久朝臣を罰せし由を驚き爰る女井浦へ詮義と思ひし所迚足早く片袖のみちぎり故後日の證據にもならしかと玉里の行衛を尋たとの物語其外種々の器量を試し一ッは清三の深切にほだされかゝる武士と親子まを父を罪せし惡人をも尋ね出し再び家を引興す補佐にもと終に清三と二世の契りを結ぶのが此一ト幕の目貫也●（八　幕　目）佐渡の國吉久配所の場忠臣松助い佐渡に渡り主人吉久に侍き他事おく忠義を盡し居る扨前幕のお梅い松助を慕ひ遙る爰へ尋ねて來れど其身い盲目なり娘ッ當才にて別れし故父の顏を知らず松助は妻子に名乘逢ッとせしかど恩人丑松の横死は全く松助の所爲なりとの嫌疑掛り詮義の幕吏坂上彦九郎態々佐渡へ來て松助を探索なすと聞及べど妻子に愛目を見せんとり無情吸すが身の爲と名乘あはぬを吉久が見兼て夫婦の名乘をさす眼目の一譚より京都にてお梅が聞た讒訴に據る吉久朝臣を忘り罪に陷せし者は

杉本坂上又七繁藏也ト物語る是を立聞く彦九郎は悪事露顯の大事を恐れ松助の他出中へ忍び入吉久お梅の両人を殺害して立去るのが幕

●（九　幕　目）新町扇屋の場今宮村清三隠家の場扨も杉本長治は玉里の今の身の上を聞傳へ是非請出さふト掛合ふ處へ此度て主個三郎兵衛が出て玉里の玉菊へ年季證文を尻し勤めを放れて仕舞たら身請の强談も是迄好た男があるおれば幾千代迄も添ふがよいぞ云ふより早川清三が出陣の祝ひを兼て玉里と婚禮の幕

●（大　詰）宇治の里智妙庵の場菴主智妙は二段目のおきさ也此菴に玉里かくしゐると兼て知たる繁藏が爲後悔の懺悔聽女二人を欺く處へ忠義の松助立歸り悪事に荷擔の奴原は斯した手曼で手廻りましたト夫より佐渡の珍事を物語る折しも爰へ智妙の弟船大工の卯の助が出て非業に死た丹松ゞ松助への言に切腹する又玉里と繁藏を切殺す爰へ淺黄幕直に切て落せば宇治扇の芝敵討の場いづれも肌ぬぎにて立ならび（玉）父を罪せー杉本長治（松）夫に加勝の彦九郎清三にと舅の敵（玉）妾よにと父の仇（松）下郎の爲には妻の怨みト双方か請寄立廻り有てドゝ敵両人を切殺し（玉）恨乃刃（松）思ひ知りたか清三出かした玉里。目出度ひ〳〵ト陣扇拔開く此あらびよりの盡愛見打出し

拳會角力圖

曾義浪吾雀両仙醒著述大本全二冊

「價金五拾錢前金にて御注文郵券代用不苦

右ハ打拳の獨稽古とも稱すべき書入の珍書也

版元ハ大阪三休橋筋北ハ寶寺町南入東側諸國評本四季の花菓の

明治十六年五月十二日出版御届（價壹錢五厘）

編輯兼出版人　大阪府平民　華本安次郎

東區北久寶寺町三丁目三十四番地

いづ方の芝居茶屋にも御坐候　道頓堀西樂園中の芝居前　中井嘉吉

太夫本　三榮

芝居茶屋　道頓堀